

2023年12月23日付 アスス暦換算  
2016年5月18、24、25日付 リーライト  
2002年8月18日付

## ホツマツタエ講座

姉ヶ崎の由来 上総の浜への上陸は 姉(弟橘姫)が先であった  
旧題名:オトタチバナ姫の年齢 (ホツマツタエの暦の一考察)

ホツマツタエ研究家 吉田 六雄

### まえがき

#### 姉ヶ崎の由来 (新解釈)

日本書紀、古事記の原典になったと云われている歴史書「ホツマツタエ」によれば、『景行天皇四十年の師走八日、ヤマトタケが サカム(相武)国の大磯を出発されて上総国へ渡られる際、突然の木枯らしに御船が漂い、その時に「風お鎮めん」とオトタチバナ(弟橘)姫は舳先で天地に祈られ、「我が君の 稜威おヤマトに 立てんとす われ君のため 龍となり 船守らん」と告げられるや海に入られた。諸たちは、驚いて姫の助けを求めたが、遂に姫の姿を見ることさえ出来なくなった。夜が明け 波が凧きて御船が浜辺に着き ヤマトタケは上総に入れたが、この時の年齢はアスス暦(西暦換算)にて、ヤマトタケは38歳(19歳)、入水されたオトタチバナ姫は39歳(約20歳)であり、上総の浜に上陸されたのは、姉上の妃のオトタチバナ姫が先であったことから、この上総の浜を「姉が先」→「姉ヶ崎」と呼ぶようになった。と新解釈されている。

#### (注記)オトタチバナ(弟橘)姫、ヤマトタケの年齢計算

オトタチバナ姫は、「景行天皇の初年の五月末の夜半に生まれた」との記述あり、また、入水前、上総へ渡す前の日付を「景行天皇四十年師走八日」と記述している。このことより、オトタチバナ姫の入水時の年齢は39歳であった。ヤマトタケの生年月日は、日本書紀、ホツマツタエとも記述されている。日本書紀では「景行天皇二年三月」に記述され、ホツマツタエでは「景行天皇二年師走の望」に双子の一人として生まれた(注記2)との記述がある。このため、オトタチバナ姫の入水時のヤマトタケの年齢は38歳になる。このことからオトタチバナ姫は姉上の妃であった。

#### (注記2)ヤマトタケの誕生 追伸 2023\_12\_23 付

ヤマトタケは、21ヶ月で生まれたとの記述がホツマツタエにあり、後にアスス暦の暦法を解読すると、二倍暦であった。なお、ホツマツタエは第12代景行天皇の55年で終わるが、第13代以降も記述されている日本書紀の天皇の在位年数、薨御歳を調査すると、初代神武天皇～16代仁徳天皇と17代履中天皇～33代推古天皇との間に歳の大きな段差があり、初代～16代の薨御歳の平均は約104歳。それに対し17代～33代は約64歳であった。このことより、ヤマトタケ、景行天皇の暦は、西暦に換算すると二倍暦であった。

### 年齢の計算式

名 前	生まれ年月日	入水時の年月日	年 齢
オトタチバナ(弟橘)姫 (西暦換算)	景行天皇初年五月末	景行天皇四十年師走八日	39歳7ヶ月 (約20歳)
ヤマトタケ (西暦換算)	景行天皇二年師走望	同 上	38歳 (約19歳)

## オトタチバナ姫

オトタチバナの名称は、ホツマツタエに二人登場する。一人は、モチキネ(月読神)のお母さんのオトタチバナ姫である。またもう一人は、ヤマトタケの典待妃(読み:スケツマ)のオトタチバナ姫である。今回のお話の主人公は、後者のオトタチバナ姫がその人となる。

オトタチバナ姫の外祖父と母は、「サカム(相武)の国」の人である。外祖父は元彦、実父は景行天皇の家臣のタジマモリ(育ての親オシヤマスクネ)、母の名は、花橘と云う。生まれは、五月末夜半である。名前は、景行天皇より「昔の人の 緒を整む」の→「緒をのオ」「整むのト」の短縮形で→「オト」。また母の「ハナタチバナ」の「タチバナ」をもらい「オトタチバナ姫」と名を賜わる。

また「サカム(相武)の国」の名付け由来も、ホツマ時代に現在の厚木市小野で宮仕えした外祖父の元彦が、景行天皇より「村の名も …サミシ国 サカム(相武)の国と 名付け賜わる」と記載されている。このことから古の「武蔵国」「相武(サカム)国」の呼び名の原型をホツマツタエから大いに知ることになった。今回の主人公の「オトタチバナ姫」が生まれるまでの経緯をホツマツタエ原文は、詳しく記載している。

## 37アヤ(綾)55~58

香久君が	花橘は
彼が妻	押山やりて
呼ばしむる	父元彦と
上り来る	皇子喜びて
元彦に	許し衣賜ひ
藻を勤む	花橘が
五月末	夜半に生む子に
勅り	昔の人の
緒を整む	弟橘と
名を賜ひ	似足る姿の
押山に	嫁ぐ母子も
御恵み	深き縁の
例しなるかな	

## オトタチバナ姫の生まれ年

ホツマツタエ原文は、「花橘が 五月末 夜半に生む子に」と記載している。生まれ年を記載していない。だがホツマツタエ原文は、歴史書であることを遺憾なくはつきしてくれる。「花橘が 五月末 夜半に生む子に」の前後の文章を読み整理して見る。順を追うと、垂仁天皇・99穂サシエ(7)7月→明る春弥生→5月末・オトタチバナ姫の生まれ→景行天皇初年・アスス788穂7月と読める。すると5月末は、99穂の明る春(次の春)になるため、アスス788穂(年)となる。この事からオトタチバナ姫は、アスス788穂(年)5月末の生まれであることが分かる。

## 【五月末の前文】

37ー 49 コソコホ(99穂)サシエ(7)ア(秋)フミツキ(7月)ハヒ(初日)  
37ー 50 シハス(師走)ソカ(10日)  
37ー 51 アクルハル(明る春) ヤヨイ(弥生)

## 【五月末の文】

37ー 57 サツキマツ(5月末)

## 【五月スエの後文】

38ー 1 時アスス ナオヤソホ(788穂)ノ フツキ(7月)ソヒカ(11日)

### オトタチバナ姫の半生

オトタチバナ姫は、ホツマツタエの暦の一つのアスス暦を順送りに整理するとアスス788年に生まれであることが分かった。その後の少女時代などの記載はない。

突如として、オトタチバナ姫の人生は、ヤマトタケに重なる。酒折のタケヒがホツマ国が騒ぐとの申し出に景行天皇は、西の熊曾(熊地方と曾於地方の略称)を平定したヤマトタケが再び指名する。ヤマトタケは、天皇より叢雲剣を授けられ吉備武彦と大伴タケヒを従えて旅支度する。

オトタチバナ姫は、景行天皇と竹内が相談してホツマ国の元彦を味方にし、ヤマトタケより(オト)タチバナ姫、ホヅミテシとサクラネマシを先に行かせる。ここからオトタチバナ姫が徐々に登場してくる。この時点では、ヤマトタケの典待妃であったか記載はないが、後に「押山が オトタチバナ姫 典待妃に」と記載されており、ヤマトタケの妃、内妃、典待妃の順の典待妃になっていたことが伺われる。

オトタチバナ姫の次の登場は、ヤマトタケが草薙の火攻めや相武(サカム)の小野の城の火攻めに遭遇する。その度に「火水土の袂い」により難をのがれ、敵が逃げ散り、勝ち鬨を上げて帰ってくる。この難を逃れたヤマトタケを一目見るやオトタチバナ姫は、「火中」のヤマトタケを案じて詠んだ歌「さねさねし坂向の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」と相まって、ヤマトタケの手を取り無事を安堵する。

オトタチバナ姫の三度目の登場は、師走八日、ヤマトタケの戦船が横須賀～上総間の走水で突然の暴風に見舞われた時である。ヤマトタケを守らんと「戦船 漂ふ風お 鎮めんと」の高貴愛・夫婦愛から「龍となり 船守らんと 海に入る」。この気持ちを偲びヤマトタケは、「大磯に 社お建てて 神祀り ここに留まる」で表現している。ホツマ当時も現在も「人を慈しみ・思い・偲ぶ気持ち」は変わらない様である。

### 竹内麻呂または竹内宿禰(解説)

景行天皇の命を受けて、25年7月初～27年2月13日にかけて津軽・日高見の国 の実情調査に行き、国としてだらけた様を報告する。

### 【オトタチバナ姫の龍神】

師走八日 香久籠立てて 標しとす 時ヤマトダケ 大磯お 上総さえ渡す 戦船 漂ふ風お 鎮めんと 弟橘は 舳先に登り 天地祈り 我が君の 稜威おヤマトに 立てんとす われ君のため 龍となり 船守らんと 海に入る 諸驚ろきて 求めむれど ついに得ざれば 波凧きて 御船着きけり ヤマトダケ 上総に入れば

### 【オトタチバナ姫の形見】

国津神 マチカテチカの 臣二人 弟橘の 櫛と帯 憂ば嘆きて 姫のため 浸かり綱引の 祭りなす これソサノオの オロチおば 浸かりヤスカタ 神となし ハヤスヒ姫も アシナヅチ 七姫祭る ためしもて 形見おここに 塚となし 名も吾妻森 大磯に 社お建てて 神祀り ここに留まる 花彦は 我が幸御魂 しろし召し 河合の野に 大宮お建てて祀らす 氷川神 戦器は 秩父山 如月八日に 国巡り まつらふ標し 香久籠お屋棟に捧げ こと納め ホツマの世々に ならはせや ウス牟(箱根)の坂に ヤマトタケ 別れし姫お 思いつつ 東南お望みて 思ひやり 形見の歌見 取りいたし見て「さねさねし 坂向の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」これ三度 吾妻あわやと 嘆きます 吾妻のもとや

## オトタチバナ姫を祭る神社

神奈川県には、弟橘姫を祭る有名な神社が三カ所ある。

一カ所は、横須賀市走水港の旗山崎(御所ヶ崎東海岸)の海岸沿いにあったと云う橘神社。

もう一カ所は、二宮町の相模湾岸より約5～600m離れた吾妻山(標高136)の山頂近くにある吾妻宮(吾妻神社)。

更にもう一カ所、東京湾より川崎駅・元住吉駅・野川方面に約10km陸地に入った川崎市高津区子母口の丘(標高約25m)にある村社・橘樹神社がそうである。

### ① 橘神社

祭神は、弟橘媛命である。元の鎮座地は、横須賀市旗山崎(御所ヶ崎東海岸)にあった。1883年に現在の走水神社の社がある左斜め前に移され、後に日本武尊の社に合祀された。走水神社誌の由緒沿革によると『…(省略)…橘神社の創建・弟橘媛命が御入水をして数日後、海岸に櫛が流れ着きました。村人は、その櫛を、武尊と橘媛命が住んでいた御所ヶ崎に社を建て、櫛を納めました。』

また走水神社に掲示の横須賀風物百選・走水神社の由緒によると、『…(省略)…日本武尊が渡海の際、海上が荒れ、いまにも船が沈みそうになりました。海神の怒りであると考えられた弟橘媛命は、「さねさしさがむのをぬにもゆるひの ほなかにたちととひしきみはも」の歌を残し、日本武尊に代わって海に身を投じ、風波を鎮めました。弟橘媛命は、もと旗山崎に橘神社として祭られていましたが、その地が軍用地に買収されたため、明治四十二年、この神社(走水神社:祭神は日本武尊、弟橘媛命を合祀)に祭られました。』と記載されている。

また、走水神社の境内の白砂は、合祀(1883年)以前弟橘媛命の社があった御所ヶ崎東海岸から小舟で運んで来て整齊したものと立て標識がある。当社の宮司は、親子三代の宮司が亡くなり今は、近くの神社から宮司に来て戴いていると総代よりお聞きした。

### ② 吾妻神社(吾妻宮)

祭神は弟橘媛命として日本武尊を配祀している。鎮座地は、神奈川県中郡二宮町(旧:吾妻村)である。社の由緒記によると「後に命の御櫛が海辺に流れ着き埋めて御陵を造る。この前下一帯を埋沢といひ梅沢と同音である。また命の小袖が磯辺に漂いこれを取りて山頂に祭った云う。その海岸を袖ヶ浦と云う。…(中分省略)…弟橘媛命の御神体は木彫の千手観音で既に数千年星霜を経て…(中文省略)。(吾妻神社の由緒記による)現在宮司は、川勾神社の宮司が兼ねていると総代よりお聞きした。

### ③ 橘樹神社

祭神は日本武尊、弟橘媛である。鎮座地は、川崎市高津区子母口である。社の修復記念碑文によると「…(中文省略)…後日、媛の装身具の一部がこの地に漂着し 村人は媛を偲んでそれを此の地に埋めて祀った。尊は御東征の帰途 再び此の地に立ち寄り媛を慰霊するため一社を建立したのが当社の創建と伝えられている。」(橘樹神社修復記念碑による)

また橘樹神社より250m離れた所に子母口富士見台古墳がある。この古墳の川崎市の掲示版の説明によると、現在の規模は墳丘高3.7m、墳丘径17.5mkの大きな円墳である。この古墳には、古くから弟橘媛にちなむ話が伝えられている。橘樹神社の社伝では、…(中文省略)…弟橘媛命の御衣・御冠が、この地に漂着したと伝えられている。…(中文省略)…」橘樹神社の宮司は現在、川崎市の元住吉駅近くにある住吉神社の宮司が兼ねているとお聞きした。また橘樹神社より250m離れた所に子母口貝塚がある。

だが、この二カ所の「古墳の揭示版」と「吾妻神社の由緒記」にはある共通したことが書いてあった。それは、古事記の記述を参考していることでした。子母口古墳は、「古事記では かれ七日ありて後に」、吾妻神社は「其の七日後に」と表記していた。

### 検証・オトタチバナ姫の神社

橋神社と吾妻宮と橋樹神社。三つの神社はいづれもオトタチバナ姫を祭神とする「古代まで謂われを遡る神社」である。この三つの神社について、先に記載したホツマツタエ直訳文【オトタチバナ姫の形見】部分が、一致するかホツマ研究家として検証してみた。検証方法は、ホツマツタエ直訳文に対して神社の環境や周囲の地形および地名等が、よりホツマに一致しているかの「新たな検証」である。検証データの順番は、①橋神社、②吾妻宮また③橋樹神社の順に表示する。(順番に他意はない。)

まず比較文は、「弟橋の 櫛と帯 憂ば嘆きて 姫のため 浸かり綱引の 祭りなす ……ためしもて 形見おここに 塚となし 名も吾妻森 大磯に 社お建てて 神祀り ここに留まる 」の文からである。

### I、「浸かり綱引」の言葉から「櫛と帯」が流れ着く様な、すぐ海岸近くに神社が建立されているかの調査である。

- (1)橋神社は、走水海岸沿いになる。
- (2)吾妻宮は、相模湾岸より約5～600m離れた吾妻山(標高136)にある。だが袖ヶ浦の地名が海岸沿いにあるが、少し離れた県道沿いは海拔約20mと急になる。なお袖ヶ浦の「袖の言葉」はホツマツタエの記載にはない。
- (3)橋樹神社は、川崎の海岸線より約10km離れた陸地にある。だが神社の標高は、約25mであるが、麓近点の海拔は、7.8mである。また250m離れた所に「貝塚」が発見されている。更に近く地下をボーリング調査した結果でも深さ15.7m付近より下に貝殻混じりの層があることが分かっている。(参考文献:川崎市計画局・1965年川崎市地質図集)この様に橋樹神社高台付近の麓は、古代には浜辺であったことが立証される。浜辺であればオトタチバナ姫の「櫛と帯」が流れて来たとしても当然とあろう。

また地名の「子母口」にも浜辺であったことが隠されていた。子母口を平仮名で筆記すると「しほくち」となる。「しほくち」の訛りを戻すと「しほくち」になる。「しほくち」は、「しほ」と「くち」の連結語からなり「しほ」は「塩」のこと。「くち」は「入り江」を意味する。このことから橋樹神社のある地形は入り江口になっており、このことから古は「入り江口の浜辺」だったことが分かる。「子母口」の地名は、古を残す数少ない言葉と思えてならない。また「鬼子母神」を元とする解釈もある。

### 次にII、「塚となし」の有無であるが、

- (1)旧橋神社周辺は、こん森とした小山になっているが、塚はないとお聞きした。
- (2)吾妻宮周辺にも見られないために、吾妻宮の総代に問い合わせたが、塚はないとのこと。
- (3)橋樹神社は、近くに円墳の子母口富士見台古墳があり、川崎市の揭示板には弟橋媛命にちなむ話を伝えていると記載している。

### 更にIII、「名も吾妻森」と呼ばれているか。

- (1)旧橋神社周辺は御所ヶ崎と云われている。
- (2)吾妻宮周辺は、吾妻森ではないが、吾妻山と呼ばれる山である。
- (3)橋樹神社の周辺にもは吾妻の地名はない。付近は古くは橋樹郡と云われていたために現在でも小学校や中学校やボーリング場の名前に橋やタチバナを冠した名前が見える。

最後にIV、「大磯に 社お建てて 神祀り ここに留まる」である。

大磯、現在の大磯町には神奈川県神社庁に掲載される神社はない。だがホツマツタエには「大磯に社を建てて…」とあるが、真意が掴めない。

だが遡って検証するとホツマツタエ原文は、サカム(相武)の小野にて火攻めにあっている最中に「ヤマトダケ 櫓のたけに 登り見て 吉備武彦お 大磯え」や上総へ渡る時に、「時ヤマトダケ 大磯お 上総さえ渡す」と記載している。

参考文献として、

萬葉集辞典(佐佐木信綱著:平凡社)を広げたが、「おおいそ」「おいそ」の地名は見られない。また日本地名ルーツ辞典(創拓社)には、「大磯里は奈良時代にみえる里名」となっている。また日本書紀(武田祐吉校注)は、「亦進相模、欲往上総」「訳:また相模に進して、上総に往かむとし」と大磯を追求していない。

オオイソの訳は、「磯の浜」などの大磯か、地名の大磯か今後の研究を必要とする。

現在分かっていることは、大磯町の隣町に、旧名の吾妻村(現在の二宮町)に②吾妻宮がある。①旧橋神社と③橋樹神社は、大磯町より遠く離れていることである。

(今回は、ホツマツタエの検証のために、社の由緒記・修復記念碑文は対象外した。)

オトタチバナ姫の独り言

「さねさねし 坂向の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」の私の歌は、五七五 七七音節の「若歌」の歌ある。また「さねさねし」の意は、「さねざねしく泣く」や「一人寂しく声を殺して泣く」である。

だが「さねさねし」を「さねさし」とした四七五 七七音節は、「和歌」に対し1音節が不足している。このままでは、私はヤマトタケを慕って泣けな一いとの声が聞こえそう。

解説

「さねさし」の意味を全訳古語例解辞典(北原保雄編)にて見てみると「相模にかかる 枕詞」と記載している。但し「さねさねし」の単語は、記載されてない。

また歌は私が亡くなったあとウスヰ(箱根)はこの坂にて、ヤマトタケが私を哀れに想い、私の想い・慕う心を私に代わって詠んでくれたのに、いつの間にか「走水での入水時」の歌に変わっている。もう少しホツマツタエ原文を見て頂けたらと思う。

『ウスヰ(箱根)の坂に ヤマトタケ 別れし姫お 思いつつ 東南お望みて 思ひやり 形見の 歌見取りいたし見て「さねさねし 坂向の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」これ三度 吾妻あわやと 嘆きます 吾妻のもとや』

オトタチバナ姫の終焉地

『時ヤマトダケ 大磯お 上総え渡す 戦船 漂ふ風お 鎮めんと 弟橋は 舳先に登り 天地祈り 我が君の 稜威おヤマトに 立てんとす われ君のため 龍となり 船守らんと 海に入る』

オトタチバナ姫を追って、神奈川県の中の三つの神社を訪ねた。ホツマツタエに記載のオトタチバナ姫は、どこに眠っているか。また「櫛と帯」は、どこに埋葬されているか。私の疑問が解けるのは、もう少し時間がかかる様に思う。その理由は、訪ねた橋神社と吾妻宮と橋樹神社ともオトタチバナ姫に由来する「足跡になる物証」を残しており、三社とも「オトタチバナ姫の神社」を確信したからである。またホツマツタエを読む

度に、「オトタチバナ姫の三社」を訪問するであろう。

本文の題名は、「オトタチバナ姫の年齢」としました。走水神社を訪ね総代責任者の鈴木さんより「社の拝殿前」にお座りして社の由来をお聞きしました。この地を訪れたヤマトタケは、御年三十三才の時だったそうです。だがオトタチバナ姫の年齢については、ご存じなかった様です。このために「オトタチバナ姫の年齢」としました。(後に、ホツマの記述を調査結果、38歳であった。)

### オトタチバナ姫の御歳

ホツマツタエ原文を読むと、39—1文～39—83文までは景行天皇の御代40穗(年)であることが分かる。その文中の39—34文にてヤマトタケが「上総に渡る」記載は、師走八日となっている。この事から「オトタチバナ姫の入水」は、景行天皇40年のことであることが分かる。その入水は、時アスス827年の12月8日に換算できる。

### 【上総に渡るの前文】

39— 1 ヨソホ(四十穗)セミナ(六)ツキ(月)  
39— 14 カナ(十)ツキ(月)フカ(二日)ニ  
39— 27 ナソカ(七十日)ヒデリ(日照り)ニ

### 【上総に渡るの文】

39— 34 シハス(師走)ヤカ(八日)

### 【上総に渡るの後文】

39— 84 ム(睦)ツキ(月)スエヤカ(二十八日)  
39— 90 キサラキ(二月)ヤカニ(八日)  
40— 1 ヨソヒ(四十一穗)ハル(春)

このアスス暦よりオトタチバナ姫の御歳は、入水年月より生まれ年月を差し引くと御歳が判明する。従って式は、(入水年月アスス827年12月) — (生まれ年月アスス788年5月)を差し引いて、39才と7ヶ月(西暦換算約20歳)になる。現在で云うと熟女でしょうか。ヤマトタケに取っては、年上の典待妃であった。

(おわり)